

社会的事象を「自分事」として捉え、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した社会科授業づくり

— 歴史学習における地域教材の活用を通して —

藤澤美咲¹

社会的事象を自分たちの生活とのかかわりの中で捉えさせることで、児童が意欲を持って追究し、考えたり表現したりすることができる考えた。本研究では、地域と日本の歴史を比較することによって歴史的事象を捉えさせ、これからの社会について考える場面を設定した授業を展開した。授業実践の中では、自分たちの生活と関連付けて考えたことを伝え合い、思考を深めている児童の姿が見られた。

はじめに

グローバル化の進展、技術革新等により社会構造や雇用環境は急速に変化し、将来の予測が困難な時代といわれている。このような社会を生きていく子どもたちには、自ら考え、行動することのできる力、他者と協働して粘り強く課題を解決していく力を培うことが求められている。

平成28年12月に示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下「答申」という)では、社会科における現行学習指導要領の課題として「主体的に社会の形成に参画しようとする態度や、資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分であることが指摘されている」(中央教育審議会2016)と述べている。

研究の目的

本研究は、社会科の学習を通して調べたことや資料を基にして、主体的に考える力や表現する力を育成するための手立てを考案・実施することを目的とした。

研究の内容

1 研究テーマについて

(1) 「自分事」について

本研究では、「自分事」について「自分の生活とのかかわりの中で捉え、自分に関係のあること」と定義した。

社会科の目標は、小学校学習指導要領に示されるよ

うに、社会生活を学ぶことによって「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことである。社会に関心を持ち、社会を理解し、社会にかかわろうとする児童の育成が求められている。

しかし、特に、第5学年、第6学年で学ぶ我が国の事象や国際社会についての出来事は、児童によっては、自分とはかけ離れた世界で起こっていることだと考え、社会的事象を自分には関係のない「他人事」として捉えることもあると推測される。

そのため、学習の課題が児童にとって、追究したい課題となることが重要である。追究したいという意欲を持ち、学習に取り組むことができる課題を設定することで、児童は課題について主体的に調べたり、考えたりする。主体的に追究し、考える過程を通して、社会的事象を「他人事」ではなく、「自分事」として捉えることができる。

また、社会的事象を「自分事」として捉えた上で、社会のより良い発展について考える学習活動を展開すれば、児童に歴史を学ぶ意味についても意識させることができると考えた。

(2) 地域教材の活用

歴史学習では、学ぶ内容は我が国の歴史上の主な事象についてであり、教科書においても日本の歴史的事象や典型的な事例が挙げられている。それらの事象や事例は、児童にとって自分の生活と直接のかかわりが見えにくいものである。しかし、歴史上の主な事象が自分たちの生活する地域の歴史とつながっていると知るとは、社会的事象を「自分事」として捉えるきっかけとなる。それによって、歴史学習に対する興味・関心が湧き、学習課題に対して意欲を持って追究することにつながる。

そこで、本研究では、社会的事象を「自分事」とするための手段として地域教材を活用した。

(3) 思考力・判断力・表現力等の育成

「小学校学習指導要領解説 社会編」(平成20

1 秦野市立西小学校

研究分野(授業改善推進研究 社会)

年) (以下「小学校解説 社会編」という) では、社会的な思考力や判断力について、社会的事象の特色や相互の関連、意味について考える力とし、表現力について、調べたことや考えたことを表現する力と説明している。

また、澤井は「思考力・判断力」について、「子どもが、もっている知識（理解したことを含む）や資料活用等で得た情報をもとに『比較』『関連』『総合』『再構成』などの思考方法を駆使して学習問題を追究・解決するために考える力」であり、「社会的事象から問いを見いだして予想したり社会的事象の特色や意味などを考えたり判断したりする場面で使われる力」とも述べている。「表現力」については、「観察や資料活用などを通してわかったことを表現する力や考えたことを言語などで表現する力」としている（澤井 2013）。

これらのことから、本研究では、社会的事象について、日本の歴史を地域の歴史と比較したり関連を見付けたりすることで、時代の特色や国民生活について考えることができ、社会へのかかわり方について選択・判断する学習活動を取り入れることで、思考力・判断力の育成を図ることができると考えた。

学習課題について自分の考えを持ち、友達と意見を共有し、話し合うことで、様々な視点から社会的事象を捉え、自らの考えを深めることができる。さらに友達と話し合うことを通し、分かりやすく自分の考えを説明することで、表現力を育成することができると考えた。

2 研究の仮説

地域教材を活用し、社会的事象を「自分事」として捉えさせ、意欲的に追究し、考えたり表現したりすることができれば、思考力・判断力・表現力等を育成することができると考え、次の仮説を立てた。

社会的事象を「自分事」として捉え、地域の歴史と日本の歴史を比較し、資料や調べたことを基にして、話し合い活動を取り入れた授業を考案・実施することは、思考力・判断力・表現力等を育成するために有効である。

3 研究の手立て

(1) 地域教材による比較

本研究では、模造紙に作成した年表へ空中写真を貼ることで、場所による違い、時間の経過による変化に着目できるように資料を提示した。

自分たちの生活圏が写っている空中写真を提示することで、興味を持たせることができる。さらに、空間的な広がりや時間の経過に着目して、秦野市と東京都の戦後の発展の違いについて比較し、気付いたことや疑問に思ったことを追究する活動を展開することで、児童の学びを深めることができると考えた。

(2) 「自分事」として考えるまとめ

単元の終末に「これからの秦野」を考え、話し合う場面を設定した。

澤井は、さまざまな課題を持つ成熟社会を迎えた現在、未来志向型の社会科をどのようにつくっていくかを考える段階に入っていると述べ、「よりよい社会の形成への参画を社会科は大事に」し、「過去から学んだことを通して、さまざまな意見の合意形成を図りながら、未来をつくっていくことを重視している」（澤井 2015）としている。

また、「平成 29 年度全国学力・学習状況調査 報告書【質問紙調査】」において、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」と回答している児童の割合は、平成 27 年度に比べやや低くなったものの、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えさせるような指導を行った」と考えている学校の方が、地域や社会をよくするために何をすべきかを考えている児童の割合が高いという結果が示されている（国立教育政策研究所 2017）。

こうしたことから、将来の地域社会の在り方について考えることは、児童が、地域社会に関心を持ち、どのように地域にかかわっていくべきかを考えるきっかけとなる。社会科で学んだ事象を踏まえて将来の地域社会の在り方を考えることで、学習した知識と自分たちとの生活のつながりが見え、社会的事象を「自分事」として捉えることができる。社会的事象を調べ、社会的事象を理解し、理解したことを基に課題を解決しようとする学習過程を通して、思考力・判断力・表現力等の育成を図ることができると考えた。

「自分だったらどうするか」という視点を持って考えを深めていくことで、社会の形成に参加する関心や意欲を高めることにもつながると考えた。

検証授業では、過去の出来事は現在につながっていることを捉えさせた上で、過去や現在の出来事を踏まえながら未来について考えさせたいという思いから

「将来、どんな秦野市に住みたいかを考えよう」という学習課題を設定した。まず、個人で考える時間をとった後、班ごとに話し合わせ、意見をまとめさせた。その後、班でまとめたことを学級全体に発表させるという学習計画を立てた。

(3) 付箋紙による伝え合い

班での話し合いの前に、個人の意見を付箋紙に書かせた。これは、児童が意見を書く時間を確保するとともに、付箋紙に記された内容を班で共有することで、同じような意見をまとめたり、班のメンバーの意見を比較したりすることをねらいとした。そして、自分の意見と相手の意見を比べたり関連付けたりしながら話し合うことで、個々の考えを深めることができると考えた。さらに、相手に分かりやすく伝えたり班で意見をまとめたりする過程を通し、説明する力の育成も目指

した。班で話し合った内容はクラス全体に発表し、情報を共有した。

4 検証授業について

(1) 検証授業の概要

【実施日】平成29年10月24日(火)～11月6日(月)
 【対象】秦野市立西小学校6年生 2クラス(計65名)
 【単元名】平和で豊かな暮らしをみざして(教科書:教育出版「小学社会6上」 pp.134～145 学習指導要領:内容(1)ケ)

【単元目標】

・日本国憲法の制定や東京オリンピックの開催、高度経済成長などを通して、戦後の日本が平和で民主的な国づくりに取り組み、国民生活が向上するとともに、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解することができる。

・平和で民主的な国家・社会の形成者の一員として、これからの社会のより良い発展について考えることができる。

(2) 検証授業の構想

ア 単元設定の理由

本単元は、「小学校解説 社会編」の第6学年の2内容(1)ケ「日本国憲法の制定, オリンピックの開催などについて調べ, 戦後我が国は民主的な国家として出発し, 国民生活が向上し国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことが分かること。」(文部科学省 2008 p.82)を受けて設定した。戦後から現代までを扱う単元のため、児童が今の自分たちの生活や地域とのつながりをつかみやすい。

歴史的事象を理解した後で、児童がこれからの秦野の在り方を考える過程を通し、地域への愛着やより良い社会を創ろうという公民的資質の基礎が養われ、これからの社会の在り方を考え、希望を持って関わっていくこうとする意欲を高めることもできる。

これからの秦野の在り方について考えることで、政治の働きについて学ぶきっかけにもなり、公民の学習にもつながると考えた。

イ 単元計画

「答申(別添資料)」の「社会科, 地理歴史科, 公民科における学習過程のイメージ」を参考に、「課題把握」(1～2時間目)「課題追究」(3～6時間目)「課題解決」(7～8時間目)の学習過程を計画した。

(3) 検証授業の実際の様子

ア 地域教材による比較

模造紙に作成した年表へ空中写真を貼ることで、時代、場所の双方から、戦後の発展の様子について比較できるようにした。

空中写真は、各班に1セット8枚を配付した。秦野市4枚(1946年、1963年、1978年、2007年)と、東京都4枚(日本橋周辺(1947年、1963年、1979年、2009

第1表 指導計画

| 時間 | 学習活動・内容 | 本時のねらい | 評価の観点 | | | |
|----|--|---|-------|---|---|---|
| | | | 関 | 思 | 技 | 知 |
| 1 | 戦後の日本は、どのように発展したのだろうか | | | | | |
| | ・戦後の主な出来事について、教科書や資料集で調べ、模造紙にまとめる。 | ・我が国の戦後の歩みに関心を持つ。 | ○ | | ◎ | |
| 2 | ・日本国憲法や戦後の諸改革について調べ、まとめる。 | ・日本国憲法の制定や様々な改革について調べ、戦争直後の社会の様子について理解する。 | | | | ○ |
| 3 | ・戦後から現在までの東京都と秦野市の空中写真を比較する。 | ・戦後の日本の発展の様子について関心を持つ。 | ◎ | | ○ | |
| 4 | ・班ごとに分かったことや疑問点を話し合い、班の学習テーマを決める。 | ・戦後、どのような社会を目指したのかについて調べていく学習問題を設定できる。 | | ○ | | |
| 5 | ・秦野市の戦後の歩みについて調べる。 | ・産業や経済が急速に発展した様子を調べ、それに関連して社会の様子や人々の暮らしの変化を考えることができる。 | | | ○ | |
| 6 | ・調べた内容を発表する。 ・戦後日本の発展についてまとめる。 | ・産業や経済が急速に発展した様子を調べ、それに関連して社会の様子や人々の暮らしの変化を考えることができる。 | | ◎ | | ○ |
| 7 | 将来、どんな秦野市に住みたいかを考えよう | | | | | |
| | ・これまで学んできたことをもとに、日本や秦野の在り方について、グループで考える。 | ・これまで学んだことをもとにして、より良い日本や秦野の在り方について考えることができる。 | ○ | ◎ | | |
| 8 | ・日本や秦野の在り方についてグループで考えたことを発表する。 | ・これまで学んだことをもとにして、より良い日本や秦野の在り方について考えることができる。 | ○ | ◎ | | |

年)、または品川駅付近(1947年、1963年、1979年、2006年)である。東京都の空中写真は、日本橋周辺の写真を配付する班と品川駅付近の写真を配付する班に分け、他の班の年表を見たり、発表を聞いたりすることで、戦後の発展の様子を捉えることができるようにした。白黒写真なので、道路はオレンジ、海・川は青など、クラスで基準を統一して着色させることで、土地利用の変化等についての視点を明確にした。また、調べたこと(青)、分かったこと(黄)、疑問点(ピンク)をそれぞれ付箋紙の色で区別した。

児童は、空中写真をよく見て秦野市と東京都の発展

の様子やその違いを捉えていた。

第2表 空中写真の比較のポイント

| 秦野市 | 東京都 | |
|-------------------------------|--------------------------------|---------------------------------------|
| 西地区(学区) | 日本橋周辺 | 品川駅付近 |
| ・住宅地が増加する様子や道路が作られる様子が分かりやすい。 | ・教科書に日本橋周辺での高速道路建設の様子が掲載されている。 | ・東京モノレールの建設の様子が分かる。 ・工業の発展の様子が分かる。 |

イ 「自分事」として考えるまとめ

「将来、どんな秦野市に住みたいかを考えよう」という学習課題を提示した。考える際に、①今の秦野市はこんな市(現状把握)②将来こんな市にしたい(課題把握)③そのためにこんなことをする(行動の具体)の3つの観点を提示し、考えさせた。

以下、①～③について、班の話合いを通してまとめられた意見を示した。

第3表 A班の意見

| |
|--|
| ①いなかなところ 水がきれい。 人が優しい。 |
| ②住みやすいところになりたい 人口が減っているから住みやすくして人口を増やす。 いろいろな人を受け入れる。 |
| ③みんなで協力して、きれいにする 道路にごみが落ちているから、ポイ捨てをしない。 人とのコミュニケーションを増やす。 |

A班は課題追究の過程で、人口に着目し、秦野市と東京都の人口の増減について調べ、その推移をグラフにしてまとめていた。調べる中で、平成29年11月に発行された市の広報紙の記事から、秦野市の人口が減少していることを知り、課題として捉えていた。そのため班の話合いを通して、人口を増やすことが必要であると考えていた(第3表)。

第4表 B班の意見

| |
|--|
| ①自然が豊かで建物も多いところ 自然が多く、家や建物が多い。 道路が狭い。 |
| ②今より交通が便利で豊かなところになりたい 今より外国に行く仕事や、国内でも遠くに行く仕事が増えると思うから、もっと交通を便利にする。 |
| ③道路を広くしたり増やしたりする |

B班は、交通が便利になることによって、より住みやすく豊かな市になると考え、班の考えをまとめた。「交通を便利にするためには人口を増やさなければいけないから秦野市をPRしよう」といった考えや、「交通を便利にするために税金を高くする」といった考えを出し、話し合う姿も見られた(第4表)。

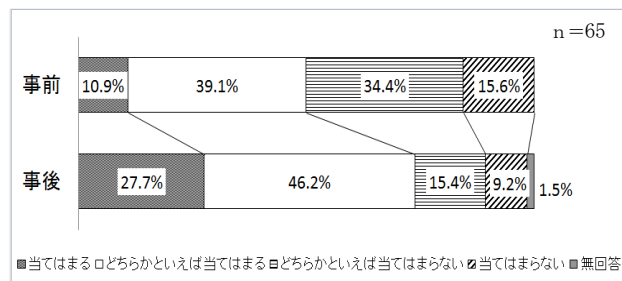
ウ 付箋紙による伝え合い

話し合いの際には、付箋紙を動かしながら、意見を交流したりまとめたりしていた。その過程で、「どのような秦野市にしていきたいか」について自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら、秦野市がより良くなるためには具体的にどのような取組ができるかを話し合う姿が見られた。

5 検証授業の結果・考察

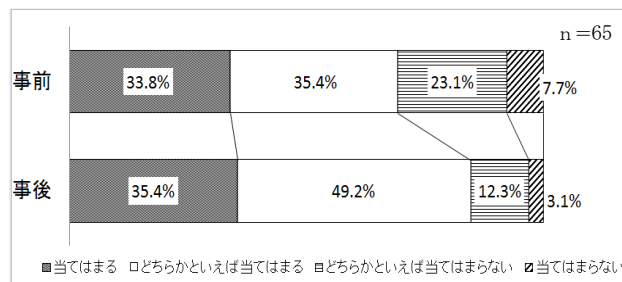
児童の社会科学習に対する意識がどのように変容したのかを知るため、所属校6年生を対象に事前アンケート(平成29年9月実施)と事後アンケート(平成29年11月実施)を行った。両アンケートは同じ質問項目で実施し、回答を比較することで児童の意識の変容を見た。また、検証授業において、各時間の振り返りの記述から児童の思考を読み取った。

(1) 地域教材による比較



第1図 秦野市の歴史と日本の歴史は、関係があると思うか

「秦野市の歴史と日本の歴史は、関係があると思うか」という問いでは、事前アンケートで「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は50.0%であった。事後アンケートでは、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は73.9%と、23.9ポイント増加した(第1図)。



第2図 秦野市の歴史と自分たちの今の暮らしとは関係があると思うか

「秦野市の歴史と自分たちの今の暮らしとは、関係があると思うか」という問いでは、事前アンケートでは「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は69.2%であった。事後アンケートでは、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は84.6%であった(第2図)。

(児童C振り返りカードの記述)

東京オリンピックのころには、東京ではモノレールが開業していて、秦野では国道 246 号線が開通して、暮らしが便利になっていた。今の秦野は自然が多くて建物もある町だから、これから先も今の秦野のままがいいと思った。秦野の歴史をもっとたくさん知りたいと思った。

児童Cは授業の振り返りの中で、秦野市と東京都の共通点を見つけ出し、国民生活の向上を捉えている。また、暮らしが便利になったという事実から「これから先も今の秦野のままがいいと思った」と、これからの自分の生活と結び付けた記述をしている。さらに「秦野の歴史をもっとたくさん知りたいと思った」と、関心の深まりや意欲の高まりが見られた。

これらの結果や児童の記述から、児童は秦野市と東京都を比較する学習活動を通して、自分の生活と歴史的事象とのつながりを感じるようになったと読み取れる。自分とのつながりを感じられたことで、興味が湧き「もっと知りたい」という意欲が高まったと考えられる。

(2) 「自分事」として考えるまとめ

次は、「将来、どんな秦野市にしたいか考えよう」という学習課題に対する、学習後の児童の振り返りである。

(児童D振り返りカードの記述)

今の秦野をどうやってキープするのか、どうやって自然を守るのかを自分たちで考えて、取り組んでいきたいです。

児童Dの「どうやって自然を守るのかを自分たちで考えて、取り組んでいきたい」という記述からは、自然に着目し、社会的事象を「自分事」として捉えている様子が分かる。また、「自分たち」と記述しているところに、他者と協働し課題を解決していこうとする姿勢が見られる。

(児童E振り返りカードの記述)

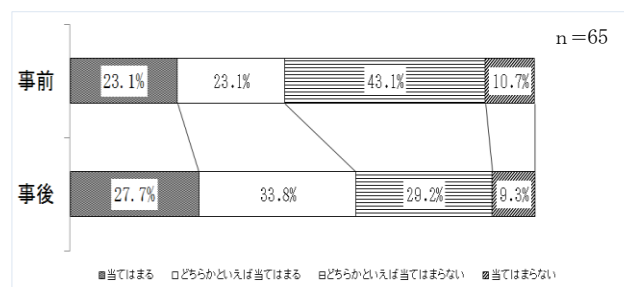
今回の勉強で、今の秦野市にしてくれたのは、昔の人々の努力があったからこそだと思った。これから私たちは 18 才から選挙に参加できるから、これからの秦野を築き上げていく時まで、あと 6 年。私は、今の秦野の良い所、自然などを残して、今よりもみりよく感じられる幸せで笑顔に満ちた秦野にしていくため、秦野を動かしていきたい。

児童Eは「今の秦野があるのは昔の人々の努力があったからこそだ」と戦後の復興と人々の働きを結び付けて記述をしている。その後、「私たちは 18 才から選挙に参加できる」と記述し、選挙という具体的な政治参加について考えを巡らせている。「幸せで笑顔に満ちた秦野にしていくため、秦野を動かしていきたい。」と今後の自分の在り方を考える記述も見られる。

これらの児童の記述から、地域の歴史を学ぶことで、自分の生活とのつながりを捉えることができたことを読み取れる。そして、これからの自分たちの地域について考え、地域づくりに参加しようとする意識の芽生えを見取ることができた。

(3) 付箋紙による伝え合い

社会科の授業で、「意見を出して、友達と話し合うことができるか」という問いでは、事前アンケートで「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は 46.2%であった。事後アンケートでは、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は 61.5%と、15.3 ポイント増加した(第 3 図)。



第 3 図 意見を出して、友達と話し合うことができるか

(児童F振り返りカードの記述)

社会であまり発表ができない私だけど、自分の考えを書くことによって、わたしは自分の意見を話せるようになりました。それがすごくうれしかったです。また、ほかの班の人はこういうふうに思っているんだなあとか、考えがみんな違うからいろんな意見があっても良かったです。

児童Fの「自分の考えを書くことによって、わたしは自分の意見を話せるようになりました」という記述からは、自分の考えを他者に伝える力がついたことを実感している様子が分かる。「ほかの班の人はこういうふうに思っているんだなあとか、考えがみんな違うからいろんな意見があって」という記述からは、自分や自分の班の考えと他の班の考えが違うことを捉えていることを見取ることができる。

これらのことから、付箋紙に書くことで自分の考えを相手にスムーズに伝えることにつながったことが分かる。また、班での話し合い活動では意見の書かれた付箋紙を活用して意見をまとめたことから、自他の考えの相違に気付くきっかけとなり、全体への発表の場面において、自分や自分たちの班と他の班との違いを認識することができたと考えられる。

研究のまとめ

1 研究の成果

地域教材を活用し、これからの地域社会を考える場

面を取り入れた授業を実践した結果、児童が社会的事象を「自分事」として捉えている姿を見ることができた。

また、地域社会について考えたことを書いたり、付箋紙を活用して伝え合ったりする活動を通して、社会的事象について考える力や表現する力を育成することができた。

さらに、色分けした付箋紙を使うことで、書く内容が整理しやすくなったり、話し合いの際に付箋紙を活用しながら意見をまとめたりすることができた。こうした取組は、自分と他者の意見の相違に気付かせ、自らの考えを深めるきっかけになった。

歴史学習において、児童が歴史的事象と自分たちの生活とのかかわりを感じることは、社会的事象に対する関心・意欲を高めることとなり、歴史を学ぶ意味を考えることにもつながった。

以上のことから、地域教材を活用することで児童は自分の生活と歴史的事象とのつながりを捉え、社会的事象を「自分事」として考えることができていた。児童にとって身近な話題を扱うことにより、意欲的に話し合うことができ、児童の振り返りやアンケートの結果にあるように「自分事」として捉える姿から、地域の歴史と日本の歴史を比較し、自分の考えを伝え合わせる授業を考案・実施することは思考力・判断力・表現力等の育成のための手立てとして有効であった。

2 課題と今後の展望

本研究では、社会的事象を「自分事」として捉えることができるような手立てを考案・実施することで、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した。

そのための三つの手立てに取り組んだが、歴史的事象を根拠にして自分の考えを書くことに個人差が見られた。調べ学習の際には、児童は休み時間や家庭でも意欲的に調べたりまとめたりしていた一方で、各班が調べてきた結果の活用が不十分であったことから、事象についての捉え方に差が生じてしまったと思われる。教師が事象同士の関連や地域の歴史と日本の歴史のつながりを整理し、学級全体に共有させる工夫をすべきであった。

また、調べるための資料等の情報が多くなってしまったので、ねらいに応じて資料の精選をしたり、資料の選択が難しい児童への声掛け等をしたりするなどの工夫が必要である。

「意見を出して、友達と話し合うことができる」と回答した児童の割合は増加したものの、約4割の児童は「そう思わない」と回答している。これらの児童も付箋紙に意見を書き出すことはできたが、意見の共有に留まり、「話し合う」活動に至らなかったためであると思われる。話し合っただけで課題を解決していかうとする力は社会科だけではなく他教科でも求められている

力である。そのため、他教科等との関連を図ることも必要である。他教科で身に付けた能力や学習内容を社会科の学習でいかすことにより、社会科の学習内容の理解を深めることになり、思考力・判断力・表現力等の更なる育成が期待できると考える。加えて、話し合いが活発になりやすい問いを設定することや継続的に話し合いの指導をすることも大切である。本研究をもとにして、指導の改善・充実を図っていきたい。

おわりに

本研究では、社会的事象を「自分事」として捉える過程を通して思考力・判断力・表現力等の育成を図りたいと考え、地域の歴史と日本の歴史を比較し、追究する授業を実践した。

今後も、資質・能力の育成のために、社会とのかかわりを意識させ、課題を追究したり解決したりする活動を充実させた社会科の授業実践に取り組んでいきたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2018年1月取得) p. 132
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 社会編』 東洋館出版社
- 澤井陽介 2015 『澤井陽介の社会科の授業デザイン』 東洋館出版社 p. 37
- 澤井陽介 2013 『小学校社会 授業を変える5つのフォーカス「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培うために』 図書文化社 p. 60

参考文献

- 国立教育政策研究所 2017 「平成29年度全国学力・学習状況調査 報告書【質問紙調査】」
<http://www.nier.go.jp/17chousakekkahoukoku/report/data/17qn.pdf> (2018年1月取得)
- (2018年1月取得)
- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申) 別添資料」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_3_1.pdf (2018年1月取得)
- 粕谷昌良 2017 『「資質・能力」を育成する社会科授業モデル』 学事出版株式会社